

西条地区の御意見と県教育委員会の考え方

- ① 「小松高校の校地を使用するのなら、小松高校という名前のまま、新しいコースを設置したほうが伝統を引き継げるのではないか。」

これまでにない新しいタイプの学校としてスタートするためです。

- 愛媛県初の理数情報科や教員養成・社会共創コースを新設する周桑高校（仮称）は、職業学科を統合し学科横断的学習を目指す西条産業科学高校（仮称）と併せて、**周辺の地区に先んじた新しい教育スタイルを実践する学校**となります。**新たなスタートを切るにあたり、中身のリニューアルにふさわしい新校名に変更することも検討してはどうか**と考えています。

校名については、準備委員会（R5設置）において（現校名を含め）検討することとしています。

- 校名については、令和5年度以降に設置される準備委員会（市町行政関係者・学校関係者・地域住民等で構成）において、検討していくこととなります。
- 西条地域の中学生も含め多くの方からの意見を伺いながら、**今後入学してくる生徒に、長く愛されるような校名にしたい**と考えています。

- ② 「周桑地域の3校については、当面は現状維持でよいのではないかと。令和18年に生徒数が激減するタイミングに合わせて再編すればよいのではないかと。」

学校の勢いのある間に、足腰の強い学校にするためのものです。

- 周桑地域の3校は、いずれも定員割れが続き、各校ともに3学級規模の維持が困難になりつつあります。
- 現状の3校をこのまま維持しても、生徒の激減が予想される令和18年までに、募集停止となる学校が複数出る可能性があります。
- これ以上現状を放置し各校の小規模化が進むと、今なら可能となる工業科、農業科、家庭科等の学科横断的教育や多彩な学科・コースの新設など、生徒に選んでもらえるような魅力的な学科編成は難しくなります。



- 学校が余力のあるうちに、地域の生徒に選ばれる足腰の強い2校を設置することで、地域外への進学流出を食い止める効果も期待しています。**

学校数を維持した場合の定員数の推計（西条地区）

現状（R4）			推計（R9）			推計（R14）		
学校名	学級	定員	学校名	学級	定員	学校名	学級	定員
西条	7	280	西条	6	240	西条	4	160
西条農業	3	120	西条農業	3	120	西条農業	3	120
小松	4	160	小松	3	120	小松	3	120
東予	3	120	東予	3	120	東予	3	120
丹原	4	160	丹原	3	120	丹原	3	120
R4定員	21	840	R9定員	18	720	R14定員	16	640

※再編整備基準が示す適正規模は1学年3学級～8学級

※入学生が80人以下の状況が3年続き、その後も増える見込みがない場合は募集停止

周桑高校（仮称）の魅力化

多様な進路実現をサポートする充実した指導

【新設】理数情報科

情報系大学への進学を目指す

情報のスペシャリストになる

プログラミング

データ分析

ソフトウェア開発



異なる学科・コースの生徒が
交流し、学びの拡充

普通科

【新設】文理探究コース

夢を実現する高いレベルの進学を目指す

【新設】教員養成コース

教育学部への進学を目指す

小中学校での実習

高大連携

【新設】社会共創コース

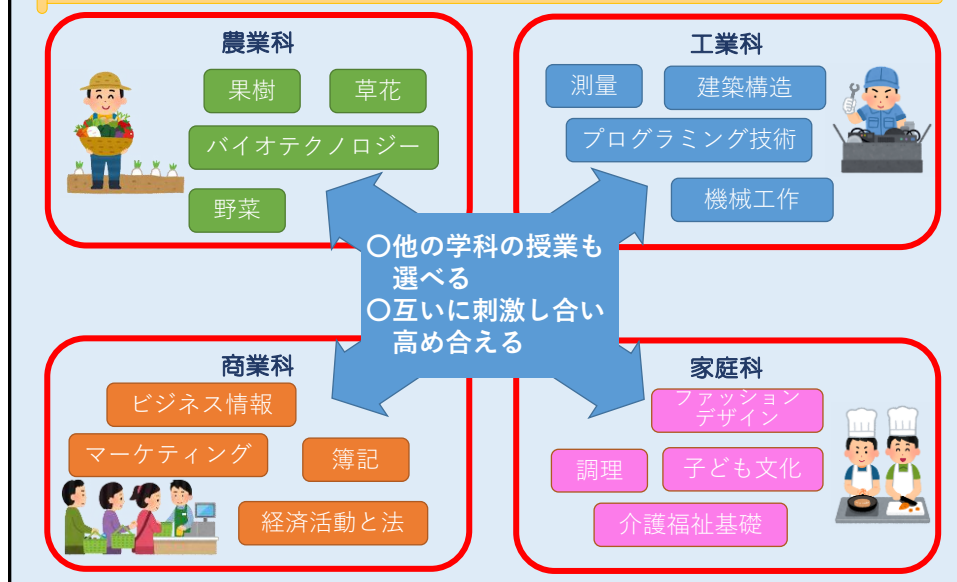
社会共創学部などへの進学や
地元自治体などへの就職を目指す

地域課題解決学習

企業や行政などと協働した学習

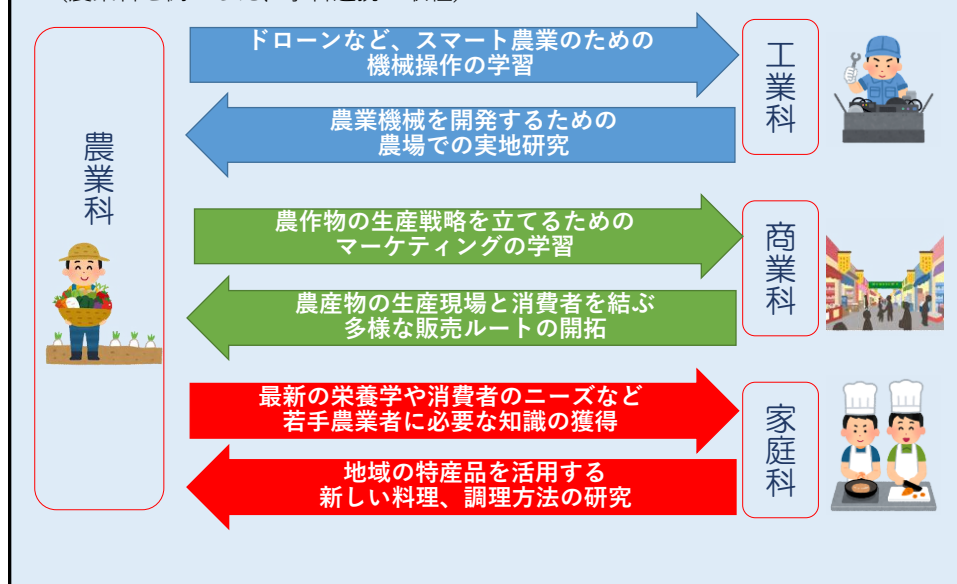
西条産業科学高校（仮称）の魅力化

職業・学科横断的学習により、地域に役立つ産業人材を育成



西条産業科学高校（仮称）の魅力化

（農業科を例とした、学科連携の取組）



- ③ 「なぜ周桑の3校を統合するのか。旧西条市内の2校もまとめて統合し、土地も買収して、新しい学校を作るのが一番よい。」

土地の買収、新校舎の設置については、財政面等の観点から困難

○現実的に、近距離にしっかりした施設を有する学校が複数存在する状況下で、新たに土地を購入し全ての校舎を新築することは、何十億円という莫大な予算と長い時間を必要とすることから、財政的にも時間的にも合理的ではないと考えます。

- ④ 「教員養成課程は、本当に実現可能なのか。具体的には何をするのか。」

大学等と連携した実習等により、将来を担う教育者を育成します。

- 愛媛大学教育学部との高大連携授業や、教育関係者の出張講義、周辺の小中学校と連携した現場実習などを通して、高校生の段階から教員の魅力に触れ、興味と関心を高め、教員になるために必要な学びを先取り学習させていきたいと考えています。
- 総合型選抜*や学校推薦型選抜での大学進学も視野に入れ、教員となるための様々な知識や経験を積むことで、将来の愛媛教育を担う教員の卵の育成を考えています。

*総合型選抜：大学が『どのような学生に入学してほしいか』を示し、これに合った人物を選抜するための入試方法。「書類、面接、小論文での選考」が基本とされているが、プレゼンテーション、実技、グループディスカッションなどを課す大学もあります。

⑤

「学校の規模が小さくなることを、なぜ弱体化と捉えるのか。小規模でも、一人一人に向き合う学校を設置するべきではないか。」

小規模校にもメリットはありますが、デメリットが大きいと考えています。

- 小規模校にもメリットがあることは承知していますが、「教科指導において専門教員が不足する」「多彩な部活動が設置できない」「学校行事が十分に行えない」などのデメリットの方が大きいと考えています。
- 高校は卒業と同時に成人として生徒を社会に送り出します。このため3年間の高校生活の中で、できるだけ大勢の仲間たちと交流をし、様々な経験を積み、多少の困難があっても自分の力で乗り越えていける対応能力を、しっかりと身に付けさせておく必要があります。
- また、**中学生やその保護者の多くは一定規模以上の高校への進学を希望しています。その意向に応えるためにも、地区内全ての高校が小規模校になる事態は避けねばなりません。**

⑥

「なぜ、この計画案をもっと早くオープンにしなかったのか。」

検討委員会や地域協議会の開催結果については、その概要をHPや新聞報道でその都度周知してきました。また、地域別計画こそ7月の公表となりましたが、適正規模や魅力化推進校制度など、計画の肝となる部分は決定後速やかに公開してきています。

- 具体的な地域別計画は、市長・町長、市町教育長、地域住民、小・中・高校等校長で構成する地域協議会において、非公開で策定作業を進めてきました。これは、生徒数の将来データや生徒の志望傾向などを詳細に分析し、それを基に冷静かつ客観的な見地からしっかりとした計画案を作り上げ、それを県民の皆さんに示すことが、行政としての当然の責務であると考えたからであり、ご理解をお願いします。